
恋?

ユウナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋？

【Nコード】

N4692I

【作者名】

ユウナ

【あらすじ】

主人公星奈結希が、運命の彼大浦龍也と恋をする。二人はこのまま幸せになるそう思っていたのに・・・二人の前にはたくさんの壁が立ちほだかり・・・

ザワザワと騒がしい教室の中に勢いよく入ってきた一人の男子生徒は「おい、みんなっ！！転校生がいたぞ！！」と大声で言った。彼の名前は近藤武瑠^{こんどうたける}。

「はあ！？それマジかよ
つちやあさと
タケル！！」といった彼はタケルの友人の土谷浅利。

「まじだつて、職員室にいたんだよ！！」と、タケルが言くとまたザワザワ騒ぎ始めた。

「女子？男子？」と一人の女子がタケルに聞いた。この子は後に私の親友になる坂本アヤ（さかもとあや）。

「女子！！」とタケルが言くと、チャイムが鳴った。

「みんなおはよう。」と、このクラスの担任加藤優理（加藤優理）が来た。

「なあなあ、加藤。転校生は？」と、つちやが言くと優理は「呼び捨てすんな。」と小声で言ってから、
「はいはい。星奈さん、入って。」と言った。

「はい。」という私は中に入った。

あつ！！自己紹介忘れてた……。私の名前は星奈結希^{ほしなゆき}。

家庭の事情でこの〇〇高校に転校することになったの。

担任の先生は優しくそうだからよかったけど、この人たちと仲良
くできるかな？できたらいいけど……。

「転校生の星奈結希さんよ。みんな仲良くね。」と
優理は言つと、

「星奈さんの席は、あそこね。」といって窓側
の一番後ろの席を指差した。

「はい。」と言つて、優理に軽く頭を下げると速足で私
は自分の席に着いた。

ホームルームが終わり教室の中が騒がしくなる。私が次の授業
の準備をしていると……。　「星

奈さんだよな？わたし、坂本アヤ。アヤって呼んでっ」と、笑顔
で手を差し出すアヤ。　「あつ……。うん。

結希つてよんで。」と、私はアヤと握手をした。

握手していた手を離す

と同時にチャイムが鳴った。そして、授業が始まった。

授業

が始まってから約に１０分たった時だった。ガラッと、ドアを開け
て中に入ってきた一人の男子。　その男子の恰好

を見てビックリ。なぜなら、その男子は耳にたくさんのシルバールピアスをしていて、ワックスで整えられた髪に、はだけたシャツ、腰のところで下げたズボン。整った眉毛に、鋭い目つきで背が高い、おそらく180ぐらいはあると思われる身長。しかも・・・かなりのイケメン。

そう、彼こそが

私の運命の人・・・。
大浦龍也おおつら たつや・・・。

こ

の時、彼に会ったこの瞬間から私の平凡な人生は終わりを告げていたのかもしれない。

「大浦、遅刻だぞ。」と社会担当の長嶋の声が教室に響く。

「あつそ。」と彼はどうしても好きそうに言うと、あくびをした。

「お前はいつもいつも．．．」と文句を言っている長嶋を無視して彼はゆっくりと歩き出した。

あの人の名前、大浦っていうんだ．．．と、のんきにそんなことを考えている私。

彼は私の隣の席に座った。
隣から甘い香りがする。香水かな？そう思いながらチラッと彼を見る。
彼は何か考え込んでいる。

ドクン。ドクン。私の胸の鼓動が大きくなる。あれ、どうしたんだろうわたし。そう思っていたその時、
「何？」と口を開いた彼。え？突然のことで何も言えない私。ただ、胸の鼓動が速くなる。

「．．．無視？」と、また口を開いた彼。私はハツとなり、「えっ．．．。」とやっと口を開けた私。

「いや、えっじゃなくて、何見てんの？」という彼。

「あつ、いやっ．．．べつに．．．。」と私は彼から視線をそらした。

「．．．。」彼は少し

の間わたしを見ると、前を向いた。

そして、長い授業は終わり放課後になった。

「ゆきっ」とアヤが来た。アヤの隣には知らない女子がいる。
誰だろう？そう私が思った時、

奈．．さん．．だよな。」と口を開いた女子。

「あつ、うん。結希って呼んで。え」と．．と私が言葉に詰まり困っていると、

「私は安西愛海。あんざいまなみ よろしく!!」と笑った愛海。

「よし!!じゃあ武瑠のとこ行こう?」とアヤは私に手を差し出した。

でも、私は首を横に振って「私が言ったら邪魔だと思うから．．。」といった。

「なあゝにいつてんのよっ!!
邪魔なわけないでしょ!!」といって、アヤは私の腕を引いて歩き出した。

「だいじょうぶ。みんな優しいから。」と愛海は微笑んだ。

アヤに強引に連れられ、私は教室の端にたまっているグループのところに来た。

「みんなあゝ。転校生の結希連れてきたよゝゝ!!」とアヤが言っていると「マジでえゝゝ」とみんながこつちを向いた。

どうしよあゝとわたしがおもっていると、
ひとりの女子が私のところに来た。そして、

「わたし羽鳥未来。はとりみき 未来って呼んで」と可愛らしい

笑顔で私に手を差し出した。

「うん！！わたしのことは結希って呼んで。」と私は未来が差し出した手を握り握手をした。

「俺は

近藤武瑠。武瑠でいいよ。」と笑った武瑠。「俺は齋藤愁^{さいとうしゅう}。愁でい

いよ。」と子供みたいにあどけない笑顔をで笑った愁。「うん。よろしく！！」と私は笑顔でみんなに言った。

そして、みんなでくだらない話をした。

しばらく話していると、ガラッと教室のドアが開いた。

そこには朝の彼、つまり龍也が立っていた。

「おつ！！龍也じゃん。どこいつてたんだよ。」と愁が言う
と、「保健室で寝てた。」と言いながら愁たちのところに来た。

ドクン。ドクン。　　まただ、何だろうこの気持ち・・・私、ほんと
にどうしちゃたんだろう。

「・・・希？結希っ！？」

「きゃっ！！」　　ボーっとしていた私

は、驚いて変な声を出してしまった。

「だいじょうぶ？なにボーっ
としてんの？」とアヤは心配そうに言った。

「うっ、ううん。平気。」と

私は心配そうな顔をするアヤに笑顔で言った。

「本当？」というアヤに私

は「うん！！」といった。

「龍也、この子は転校

生の結希。」「とアヤが言うと「ふん．．。」とだけいつて私を見る龍也。

「ほら、結希。」「とアヤに背中を押された衝撃で少し前に出る私。龍也も「ふんじゃねえよ。」「と武瑠に背中を押されて、私の目の前に来た。きゃー！！やばいつて近い、近いよー！！！！私の心臓はもうバクバク。頭もクラクラして、倒れそうだ。私の意識がとんで倒れそうになったその時、

「俺の名前は太浦龍也。
龍也でもいいから。」「とめんどくさそうに言った龍也。

「あつ、うん。私は星奈結希。結希って呼んで。」「と震える声を必死で抑えていった私。

そして、さっきまでみたいにくだらな
い話を暗くなるまでした。

—家—

「ただいま。お父さん、お母さん。」「と私は写真の中で微笑んでいるお母さんとお父さんに言った。それから私は宿題をして、自分でご飯を作り食べた。食べ終わったら、洗い物をしてお風呂に入り寝た。

きよ

うは疲れた〜。

Z
Z
Z
Z
.
.
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4692i/>

恋？

2010年10月14日23時22分発行